



1月の最終土日の2日間、第9回日本性差医学・医療学会学術集会を北光記念クリニックスの佐久間一郎先生を会長、私が副会長として、札幌の地で主催させていただいた。生殖領域では男性、女性の2つの性の役割が明確であるが、この違い以外に、実は身体機能に大きな差が認められることが知られている。米国NIHでは1985年に女性特有の病態の研究が開始され、1995年にはFDA内のOffice on Women's Healthが創設されている。日本における性差医学の潮流は2001年に鹿児島大学に初めて女性外来が

## 日本性差医学・ 医療学会学術集会

情報広報部副部長

藤井 美穂

創設、2004年には循環器内科医である天野恵子先生が本学会の前身である研究会を設立し、この分野を作り上げたことに始まる。今回は「性差医学の視点から21世紀の地球環境をみる」と大きなメインテーマを掲げてみた。温暖化、自然災害、環境汚染のみならず地球に棲む生物として、超高齢社会の中で人的資源をどう活用し、次世代にこの地球を手渡すために私たち医師が果たすべき役割を提起したかった。循環器疾患、内分泌疾患、認知症などを性差の視点から考察する臨床の演題、遺伝性疾患と遺伝学の基礎、着床前診

断など生命継続の基礎医学シンポジウム、男女共同参画シンポジウムなどが組まれた。地球環境を考察するシンポジウムでは、83歳になる堂本暁子氏の講演が圧巻であった。氏はメディア界から1989年参議院議員として初当選後、2001年に全国3番目の女性知事として千葉県知事就任まで、政界で活躍した。生物多様性についての著書も多く、名古屋開催のCOP10のフォーラムでもメッセージを発信している。私達の周りで生物多様性の破壊は知らぬ間に進み、自生の北限が九州と決まっていたはずのシユロが千葉県

まで北上してきたという。トキがいなくなり、ニホンオオカミが絶滅したように、年々動植物が日本から消滅しているそうだ。氏が天野恵子先生と北極海をクルージングした際、

眼の前で北極海の氷山が崩れ落ちるさまを見事にレンズに捉えていた。人間の科学の進歩、人口増加にともなう食料確保の際に駆使するバイオテクノロジーの使い方にも注意が必要である。便利な生活を追い求める一方の路線からの脱却を実践に移さなければ次世代にこの水の惑星、地球を手渡してできない。堂本氏の講演を聞きながら、

人間社会内の多様性をどう守るかという課題に医師である私たちの果たすべき役割は何か、発展させて考えていた。高齢者と子ども、女性と男性のおかれた生き方の差異、経済を主とした多くの格差を背景に生じた多様性を

少しずつ解決していかなければならない。堂本氏が話したように生物多様性に気がつくことをスタート地点とし、共存できる環境を守ることをゴールとすることで、粛々と解決していくしかない。産婦人科医として子どもを産みたいという生物として基本的な希望が叶えられない環境、緑のない化学物質が蔓延した環境や、貧困・虐待などに抵抗できない子どもの現実を正しい情報として社会に知らせることが始め、環境改善を粘り強く訴えることが役割だろうか。

男女共同参画シンポジウム前の打ち合わせでは、医師の勤務環境を改善するためには、医師に対する社会の認識を変えてもらうことが重要であることや、総合内科志望の研修医が多く、消化器、循環器などの専門医が減ってきている現実が問題であるなどの意見が出ていた。TVドラマでは恋人と一緒に食事している時、携帯が鳴りパートナーをおいて病院に向かう医師の姿が当然のように、見ている者に刷り込まれているが、日本の医療現場は、医師が365日24時間、患者の要望に応えられる現実がないことを社会やメディアに対して訴えてほしい、地域住民を一手に守る赤ひげ先生の存在は継続性がなく、地域医療を守るSustainableなシステム作りを医師会にお願したいと付託された。

領域の異なるエキスパートの話聞くことで、閉塞しがちな日常の課題を突破できるような力が湧いてきた。来年は生物多様性の検証に堂本氏とミヤンマーに行く約束を交わして性差医学・医療学会学術集会を閉じた。